

NEW JAPAN
PHILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2025/2026シーズン



4

April, 2025

5

May, 2025



2025/2026 Season Message



新日本フィルハーモニー交響楽団の音楽監督として3年目のシーズンが始まります。私の大好きなプロ野球でもそうですが、3年という時間は新たな体制による集中した取り組みが1つの結果を出せる期間だと感じています。振り返ると、1年目は私もオーケストラも懸命に音楽に向き合うことでお互いを知る時間でした。そして2年目の昨シーズンはそこから明らかにもう1歩、互いに踏み込んだ音作りを模索してきました。昨年秋の定期演奏会で取り上げたブルックナー交響曲第7番では、新日本フィルの現在のメンバーをよく知った上で、我々に出来る最善の努力をもって、いかに音楽と深く向き合っていくのかを、互いに探求し、音楽づくりに確かな手ごたえを得ることが出来ました。

佐渡+新日本フィルは、このような信頼と期待をさらに深めつつ、新しいシーズンをスタートさせます。

今シーズンも、就任当初からプログラムの軸として掲げた「ウィーン・ラ

イン」を中心に私自身は選曲をしました。新日本フィルがオーケストラの魅力を最大限発揮できる楽曲がラインナップされています。特に昨年に続き、新日本フィルの名手がソリストを務める来年3月の扉公演では、ヴァイオリンのビルマンさんとヴィオラの瀧本さんの活躍にぜひご注目ください。

4月に指揮するベートーヴェンの『レオノーレ』序曲と、バーンスタイン交響曲第3番「カディッシュ」の選曲には私自身大きな思い入れがあります。1985年にバーンスタインが来日し、原爆投下から40年の日に広島で指揮した〈広島平和コンサート〉と同じプログラムなのです。バーンスタインが「終戦から40年経っても、人類はまだお互いに殺し合う兵器を作り続けている」と話し、祈りと共に指揮棒を振り下ろしたシーンは忘れることが出来ません。そしてこの言葉は、終戦80年目となる2025年の我々にも大きな意味を持って迫ってきます。東京大空襲で大きな被害を受けたこのすみだの地から、平和を願う

祈りの音楽を発信したいと思います。「カディッシュ」のナレーションにお迎えする大竹しのぶさんを始め、魅力的なゲスト、ソリストたちとの共演は我々にとって大きな喜びです。

観客の皆様と素晴らしい音楽を大いに分かち合いつつ、新たなレパートリーに挑戦して次のステップを目指します。そんなワクワクするシーズンにしたいと思います。ご期待ください。

音楽監督 佐渡 裕

昨年秋の定期演奏会で取り上げたブルックナー交響曲第7番は、前シーズンより2025/2026シーズン定期会員へご継続いただいた皆様に、特典CD/ダウンロードカードとしてプレゼントしております。詳細は26ページをご覧ください。

2025/2026 シーズン

新日本フィルハーモニー交響楽団 4, 5月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ／サントリーホール・シリーズ #662 相場ひろ	3
バーンスタイン：交響曲第3番「カディッシュ」 歌詞対訳	12
すみだクラシックへの扉 #30 小室敬幸	19
楽員ストーリーズ ④7 早瀬綾香 (第2ヴァイオリン)	25
NJP from Inside	26
2025 / 2026シーズン 定期演奏会プログラム	30
NJP 5月、6月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	35
お客様からの声	37
室内楽シリーズ	39
「パトロネージュ・システム」のご案内	42

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

CCC

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業／団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2025-2026 Season
#662

4.19 [土]

トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第662回定期演奏会
2025年4月19日(土) 14時00分
すみだトリフォニーホール

4.20 [日]

サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第662回定期演奏会
2025年4月20日(日) 14時00分
サントリーホール

<指揮者によるプレトーク (開演約10分前~)>

●ベートーヴェン (1770-1827)

「レオノーレ」序曲第3番 八長調 op. 72b

Ludwig van Beethoven: Leonore Overture No. 3 in C major, op. 72b

約15分

●バーンスタイン (1918-90)

「ミサ」から 3つのメディテーション *

Leonard Bernstein: Three Meditations from "Mass" *

約15分

—— 休憩20分 ——

●バーンスタイン

交響曲第3番「カディッシュ」**

Leonard Bernstein: Symphony No. 3 "Kaddish" **

約40分

I. 祈り Invocation

カディッシュ 1 Kaddish 1

III. スケルツォ Scherzo

カディッシュ 3 Kaddish 3

フィナーレ Finale

II. ディン・トーラー Din-Torah

カディッシュ 2 Kaddish 2

[指揮] 佐渡 裕

Yutaka Sado, Conductor

[チェロ] 櫃本瑠音 *

Rune Hitsumoto, Cello *

[朗読] 大竹しのぶ **

Shinobu Otake, Recitation **

[ソプラノ] 高野百合絵 **

Yurie Takano, Soprano **

[合唱] 晋友会合唱団 **

Shin-yu Kai Choir, Chorus **

[合唱指揮] 清水敬一 **

Keiichi Shimizu, Chorus Master **

[児童合唱] 東京少年少女合唱隊 **

The Little Singers of Tokyo, Children's Chorus **

[合唱指揮] 長谷川久恵 **

Hisae Hasegawa, Chorus Master **

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙、伝田正秀

Munsu Choi and Masahide Denda, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール [4/19公演]

■特別協賛：オリックス株式会社／公益財団法人オリックス宮内財団

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))

独立行政法人 日本芸術文化振興会

公益財団法人三菱UFJ信託芸術文化財団

公益財団法人ローム ミュージック ファンデーション

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

<コンサートの感想をお寄せください>

演奏会終了後1週間以内に回答いただいた方の中から、
抽選で10名様に新日本フィルよりグッズをプレゼント!

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。
プレゼントの当選者にはメールにてご連絡させて
いただきます。

@njp.or.jpからのメールが受信できるようご設定
をお願いいたします。

<https://www.njp.or.jp/qs>

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムなどで
ご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。



オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団



Rohm Music
Foundation
ロームミュージック ファンデーション

Profile



©Takashi Iijima

佐渡 裕 [指揮] Yutaka Sado, Conductor

京都市立芸術大学卒業。1987年アメリカのタングルウッド音楽祭に参加後、故レナード・バーンスタイン、故小澤征爾らに師事。89年新進指揮者の登竜門として権威あるブザンソン国際指揮者コンクール優勝。95年レナード・バーンスタイン・エルサレム国際指揮者コンクールで優勝し、「レナード・バーンスタイン桂冠指揮者」の称号を授与される。

これまでパリ管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団、バイエルン国立歌劇場管弦楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ロンドン交響楽団、NDRエルブフィルハーモニー管弦楽団など、欧州の一流オーケストラに多数客演を重ねてきた。2015年よりオーストリアで110年以上の歴史を持つトーンクンストラ管弦楽団音楽監督を務め、欧州の拠点をウィーンに置いて活動している。海外のオペラ公演でも実績を重ねており、2003年「エクサンプロヴァンス音楽祭」での『椿姫』（演奏：パリ管弦楽団）、07年「オランジュ音楽祭」でのプッチーニ『蝶々夫人』（演奏：スイス・ロマンダ管弦楽団）、トリノ王立歌劇場では10年プリテン『ピーター・グライムズ』、12年『カルメン』、15年2月に『フィガロの結婚』を指揮。

国内では現在兵庫県立芸術文化センター芸術監督、新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督、シエナ・ウインド・オーケストラ首席指揮者、「サントリー1万人の第九」総監督を務める。CDリリースは多数あり、最新盤はトーンクンストラ管との21枚目となる『マーラー：交響曲第7番』を2024年10月にリリース。著書に『僕はいかにして指揮者になったのか』（新潮文庫）、『棒を振る人生～指揮者は時間を彫刻する～』（PHP新書）、絵本『はじめてのオーケストラ』<絵：はたこうしろう>（小学館）など。出光音楽賞（1991年）、モンブラン国際文化賞（2003年）、渡邊暁雄音楽基金音楽賞（2003年）、岩谷時子賞（2014年）、文部科学大臣表彰（2024年）などの受賞歴がある。

オフィシャルファンサイト：<http://yutaka-sado.meetsfan.jp>



櫃本瑠音 [チェロ] Rune Hitsumoto, Cello

10歳よりチェロを始める。中学3年より佐渡裕とスーパーキッズ・オーケストラに参加、首席チェロを務める。第86回日本音楽コンクール（チェロ部門）本選入選、岩谷賞受賞。第8回ビバホールチェロコンクール第2位および聴衆賞。2014年佐渡裕指揮、シエナ・ウインド・オーケストラと共演し、テレ朝「題名のない音楽会」に出演。平成27年度青山財団奨学生。2018-19年度ローム ミュージック ファンデーション奨学生。2021年パリ地方音楽院を首席で卒業。21～22年パリ・オペラ座管弦楽団のアカデミー生。22年8月「京都北山マチネ・シリーズ Vol.10」に抜擢され、好評を博す。23年日本コロムビアOpus Oneレーベルよりデビューアルバム『Le Grand Tango』をリリースし、レコード芸術の特選盤に選定される。24年4月NHK-FM「リサイタル・パッシオ」に出演。



大竹しのぶ [朗読] Shinobu Otake, Recitation

1975年 映画『青春の門 - 筑豊編 -』のヒロイン役で本格的デビュー。

同年、朝の連続ドラマ小説「水色の時」に出演し国民的ヒロインとなる。以降、主要な映画・演劇賞を数々受賞。

近年の主な作品に、舞台「スウィーニー・トッド」「太鼓たたいて笛ふいて」（24）、「やなぎにツバメは」（25）、ドラマ「PICU 小児集中治療室」（22）、「海のはじまり」（24）など他多数。

2011年に紫綬褒章を受章。著書に『ヒビノカテ まあいいか4』（幻冬舎）がある。NHK-R1「大竹しのぶの“スピーカーズコーナー”」（毎週水曜21:05～）が好評放送中。

4月26日、27日には八ヶ岳高原音楽堂にてライブを、7月10日からは京都南座、久留米、新橋演舞場にて主演舞台「華岡青洲の妻」を控えている。



©Yuji Ueno

高野百合絵 [ソプラノ] Yurie Takano, Soprano

東京音楽大学、および同大学院を首席で修了。「サントリー1万人の第九」「マタイ受難曲」「テレジアミサ」「夏の夜の夢」「三角帽子」などのソリスト、ジルヴェスター、ニューイヤーコンサートなどで主要オーケストラと共演や各地でのリサイタルが好評を博している。オペラでは、佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ2021『メリー・ウィドウ』主役ハンナ・グラヴァリに抜擢され、同オペラ2023『ドン・ジョヴァンニ』ドンナ・アンナ役に続き、2024『蝶々夫人』題名役を可憐な舞台姿と瑞々しい歌唱で喝采を浴びた。CDは『CANTARES』、『Cantar del Alma/魂の歌』を日本コロムビアよりリリース。NHK-FM「リサイタル・パッショ」、テレビ朝日「題名のない音楽会」、BSテレビ東京「エンター・ザ・ミュージック」などのメディアに出演。2025年11月、26年1月には、2025年度全国共同制作オペラ『愛の妙薬』にアディーナ役で主演が決まっている。
オフィシャルHP <https://yurietakano.com/>

晋友会合唱団 [合唱] Shin-yu Kai Choir, Chorus

関屋晋を常任指揮者とした合唱団の集合体として活動を開始し、現在コーラスマスターは清水敬一が務め、オーケストラとの共演を主たる活動としている。1980年小澤征爾指揮・新日本フィルハーモニー交響楽団 マラー：交響曲第8番「千人の交響曲」共演に際し、「晋友会合唱団」としてデビュー。その後も小澤・新日本フィルと共演を重ねるとともに、ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、ドレスデン国立歌劇場管、ロンドン響、ボストン響ほかと、またラトル、マゼール、シノーポリ、ブーレーズ、メータ、インバル、佐渡裕ほか各氏と共演し絶賛を浴びている。レパートリーは古典派・ロマン派から現代作品まで幅広く、その活動は国内はもとより海外からも注目を浴びている。

清水敬一 [合唱指揮] Keiichi Shimizu, Chorus Master

1959年東京生まれ。1982年早稲田大学理工学部電気工学科卒業。指揮法を遠藤雅古、V. Feldbrill、合唱指揮を関屋晋の各氏に師事。現在およそ20の合唱団の指揮を任される。各地で合唱とオーケストラのための作品のコーラスマスターを務め、初演した現代作品も多い。2005年に世界合唱シンポジウムに於いて講師を務める。国内外の音楽祭・作曲コンクール・合唱コンクールの審査員を歴任。著書に『合唱指導テクニック』（NHK出版）、『合唱指揮者という生き方 私が見た「折々の美景」』（アルテスパブリッシング）。現在、全日本合唱連盟およびJCDA日本合唱指揮者協会理事、東京藝術大学附属高等学校講師。

東京少年少女合唱隊 [児童合唱] The Little Singers of Tokyo, Children's Chorus

ヨーロッパの伝統音楽に基づく音楽教育を目的とする日本初の本格派合唱団として1951年設立。6歳から基礎を学び、演奏活動の中核を担う15歳から19歳のコンサートコアに加え、室内合唱のカンマーコアまで幅広い演奏活動を行う。グレゴリオ聖歌から現代作品までレパートリーは幅広く、同声から混声の合唱作品までをカバーする。松平頼暁、一柳慧、細川俊夫らへの委嘱作品も多く手掛ける。年2回の定期公演の他、1964年の訪米以来海外公演は34回を数える。国内外のオーケストラ、オペラ劇場との共演も多く、C. アバド指揮ベルリン・フィルをはじめR. ムーティ、F. ルイージとの共演では高い評価を得た。2021年に創立70周年を迎え、連続演奏会「70周年記念コンサートシリーズ2021-2023」を開催、最終公演をサントリーホールで実施。2024年5月に第34回海外公演を開催、ドイツ各地で5公演を実施。

長谷川久恵 [合唱指揮] Hisae Hasegawa, Chorus Master

東京少年少女合唱隊の芸術監督／常任指揮者。主催公演並びに海外公演を牽引する傍ら、国内外のオペラ・オーケストラの公演にてコーラスマスターを数多く歴任。混声合唱曲にも対応するグループ「コールスLSOT」や声楽アンサンブル「カンマーコア」を組織し、幅広い演奏活動を展開。国内外の合唱コンクールの審査員や合唱祭などで講師を務める。

周知のように、生前のレナード・バーンスタイン(1918~90)は、作曲家としてより指揮者として高名であった。というより、ミュージカル『ウェスト・サイド・ストーリー』の大ヒットがあったとはいえ、少なくともクラシック音楽の作曲家としてのバーンスタインをシリアスにとらえ、その作品が彼の寿命を超えて受け継がれるものであろうと想像した者は、決して多くはなかったように思われる。しかし、今世紀に入って彼の作品を聴く機会は徐々にではあるけれども増えつつあるようだ。直接に彼から影響を受けた音楽家はもちろん、彼に会ったことすらない音楽家たちの間にも、彼の作品に心惹かれ、自ら手がけるようになった者があらわれている。

バーンスタインが作曲家として名を成した1940年代から70年代にかけて、シリアスなクラシック音楽は前衛的な作風が支配的であり、調性的な音楽は軽くみられがちであった。のみならず、前衛と保守、あるいはクラシックとポピュラーの間には画然とした棲み分けが存在していた。その時代にあつてバーンスタインは、ミュージカルもシリアスなクラシックも分け隔てなく手がけ、それぞれに抜群のセンスを見せるばかりでなく、それらのスタイルをひとつの作品中ですら自在にスイッチして、ハイブリッドかつスタイリッシュな音楽を作り上げてみせた。当時にあつては、そうしたバーンスタインの作風が少なからぬ人びとから胡散臭く見えたとしても不思議はない。

しかしながら、前世紀末以来、クラシック界における前衛の地位が大きく後退し、かわって調性音楽に新たな視線が向くようになった。また他方、ジャズやロックといったポピュラー音楽、あるいは世界のさまざまな地域のローカル・ミュージックの語彙・語法を採り入れて、個性的な音楽を書くクラシックの作曲家が台頭してきた。そうした中で、クラシック音楽にどのような可能性があるのか、現代の演奏会音楽がどのような方向に向かうべきかの手がかりとして、バーンスタインの音楽が再び注目を集めるようになったのは、ひとつの必然とも言えるだろう。

■ ベートーヴェン:「レオノーレ」序曲第3番 八長調 op.72b

オペラと序曲
作曲の経緯

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)にとって唯一のオペラとなった『フィデリオ』op.72は、フランスの作家ジャン=ニコラ・ブイイの戯曲『レオノールあるいは夫婦の愛』(1798年)を原作とし、度重なる改稿を経て1814年に完成された。ベートーヴェンは大きな改稿の際に、それに合わせて序曲を書き下ろしており、最終的に決定版となった「フィデリ

オ」序曲の他に3曲の序曲を完成させている。「レオノーレ」序曲第3番は1806年に第2稿が初演された際に使用されたもので、原作に基づくタイトル「レオノーレ」は、オペラのタイトルとして興行師が提案した「フィデリオ」に対し、ベートーヴェンが要望していたものである。この曲は3曲の「レオノーレ」序曲中もっとも評価が高く、単独で演奏されるほか、『フィデリオ』の上演に際しては第2幕第2場への間奏曲としても用いられることがある。

[楽器編成]フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、[バンダ:トランペット]、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部。

■ バーンスタイン:「ミサ」から3つのメディテーション

画期的なシアターピース

歌手と演奏家、舞踏家のためのシアターピース「ミサ」はジャクリーヌ・ケネディ・オナシスの委嘱によって書かれ、モーリス・ペレス指揮、アルヴィン・エイリーの振付によって1971年9月8日に初演された。通常のカトリックのミサの進行に加えてジャズ・バンドや世界の民俗音楽など、さまざまな要素が盛り込まれたこの作品は、初演時には否定的な評価を得たものの、現在ではバーンスタインの代表作のひとつに数えられるようになっていく。

「ミサ」からの抜粋・編曲

1977年、バーンスタインはこの「ミサ」中に挿まれる3つの「メディテーション」という楽章を抜粋・編曲し、チェロと管弦楽のための「3つのメディテーション」を作成した。友人であったチェロ奏者のムスティスラフ・ロストロポーヴィチの独奏、バーンスタイン自身の指揮によって初演された。

[楽器編成]チェロ独奏、ティンパニ、マリンバ、グロッケンシュピール、ヴィブラフォン、シロフォン、吊しシンバル、小太鼓、シンバル、大太鼓、ハンドドラム、タムタム、テナードラム、フィンガーシンバル、トライアングル、タンバリン、ギロ、ハープ、ピアノ、チェレスタ、オルガン、弦楽5部。

■ バーンスタイン:交響曲第3番「カディッシュ」

※歌詞対訳は12~17ページをご覧ください

作曲・初演の経緯

レナード・バーンスタインは1955年、クーセヴィツキー財団とボストン交響楽団から、翌年に祝われる同楽団の創立75周年を記念する新作の委嘱を受けたが、指揮者として多忙を極めた時期と重なり、61年までその作曲にとりかかることができなかった。同年夏に書き始められた、語りを伴う独唱、合唱と管弦楽のための交響曲第3番が完成したのは1963年秋のことである。世界初演は同年12月10日、テル・アヴィヴにおいてバーンスタイン自身の指揮するイスラエル・フィルハーモニー管

弦楽団によって行われ、楽譜は直前に暗殺されたジョン・F・ケネディの思い出に捧げられた。

カディッシュとは? ▶ 「カディッシュ」はユダヤ教の祈りのひとつで、教徒の集まる集会所(シナゴグ)において礼拝の際に唱えられると同時に、亡くなった近親者のために祈りを捧げる際にも用いられる。ここでは伝統的な「カディッシュ」のテキストを声楽陣が歌い、語り手はバーンスタイン自身が書き下ろしたテキストを朗読する。

一宗教を超えて ▶ 交響曲第3番は、ユダヤ教の宗教色を濃く打ち出した作品と一面的にとらえられがちであるけれども、バーンスタイン自身の手になるテキストは絶対的な権威を持つ神に対して抗い、憤りを見せる点で、正統な宗教作品とは一線を画す。ここでは神と人という関係のうちに、権威的な父と、それに抗いながらも和解する子という人間的な関係が含まれている。そこにはおそらく作曲者自身と彼の父との関係も反映されており、個人的な体験や思いが重ね合わされていることで、この作品は一宗教を超えて人の心に訴える力を獲得したと言える。

曲の構成と
音楽の特徴

第1楽章 祈り~カディッシュ1。冒頭にあらわれるふたつの上行音形と「カディッシュ」の旋律は全曲を統一する重要な素材となる。「カディッシュ1」では十二音列にもとづく旋律があらわれ、激しく、緊張感をたたえた無調の部分でリードする。

第2楽章 デイン・トラー~カディッシュ2。「デイン・トラー」とは、ユダヤ教の法に基づいて行われる争いの審理のことである。語り手は心の内を言葉にして神に訴えかけるが、神は答えない。続く「カディッシュ2」では5拍子に乗って歌うソプラノ独唱が、繊細な管弦楽に彩られる。

第3楽章 スケルツォ~カディッシュ3~フィナーレ。軽やかな管弦楽に乗って語り手が自らを神に認めさせようとする「スケルツォ」に続き、「カディッシュ3」は来るべき神の王国を夢見る。「フィナーレ」はここまで登場した諸動機や旋律を採り上げ、力強いフーガを築き上げ、スケール大きいクライマックスを迎える。

[編成] フルート4(アルトフルート、ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、Es管クラリネット、バスクラリネット、アルトサクソフォン、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、小太鼓、テナードラム、太太鼓、フィールドドラム、イスラエルハンドドラム、ボンゴ、シンバル、吊しシンバル、アンティークシンバル、フィンガーシンバル、チャイム、タムタム、トライアングル、クラヴェス、テンブルブロック、ウッドブロック、タンバリン、マラカス、ラチェット、鞭、ギロ、サンドペーパーブロック、シロフォン、グロッケンシュピール、ヴィブラフォン、ハーブ、チェレスタ、ピアノ、朗読、ソプラノ独唱、混声合唱、児童合唱、弦楽5部。

あしたに必要なものをつくる。人々の心や地球がやせ細るものではない、
希望と呼べるものをつくる。そのために集まる。そして100年先を想い、大事なことに気づき、
知恵を探す。技術を生み出す。きっとよくなる。きっとよくする。
そのころさしを推進力に、つくりながら、つくりながらしあわせを見つける。

「人が生きる」につながるものを、
KAJIMAはつくる。

100年をつくる会社
鹿島

豊島美術館
鹿島特設サイト





SHARE LOUNGE

発想が生まれ、シェアする場所

シェアラウンジは、ラウンジの居心地と本による提案、オフィスの機能性を兼ね備え、訪れた人に「新しい発想を提供する場所」です。

新たな発想は心を躍らせ、生活を明るくし、世界をほんの少し良い場所にしてくれるもの。働く人だけでなく、お子さまや学生、主婦の方など、すべての人たちが日々の暮らしの中で、発想を必要としています。

ここに集まる多様な人々が風景をつくり、そこにいて刺激がもらえたり、本からインスピレーションを得ることもできる。ある時は居心地の良いカフェやバーとして、またある時は体験を促すイベントスペースとして。

新たな発想を生む、たくさんの仕掛けが詰まった空間です。

SHARE LOUNGE by Culture Convenience Club

[SHARE LOUNGE]

代官山 蔦屋書店／丸の内／Olive LOUNGE 渋谷／渋谷サクラステージほか、全国に順次拡大中。最新の店舗一覧はアプリをご覧ください。



SHARE LOUNGE
公式アプリ

App
Store



Google
Play



SUMIDA
TOBIRA of classic
2025-2026 Season
#30

5.9 [金] 10 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第30回

2025年5月 9日(金) 14時00分 すみだトリフォニーホール

5月10日(土) 14時00分 すみだトリフォニーホール

●ヒナステラ (1916-83)

バレエ音楽『エスタンシア』組曲 op. 8a

Alberto Ginastera: Estancia Suite, op. 8a

- I. 農園で働く人々 Los trabajadores agrícolas
- II. 小麦の踊り Danza del trigo
- III. 大農園の労働者たち Los peones de hacienda
- IV. 終幕の踊り(マランボ) Danza final (Malambo)

約10分

●ヒナステラ

ピアノ協奏曲第1番 op. 28 *

Alberto Ginastera: Piano Concerto No. 1, op. 28 *

- I. Cadenza e varianti
- II. Scherzo allucinante
- III. Adagissimo
- IV. Toccata concertata

約25分

—— 休憩20分 ——

●バーンスタイン (1918-90)

『ウエスト・サイド・ストーリー』より「シンフォニック・ダンス」

Leonard Bernstein: Symphonic Dances from "West Side Story"

- プロローグ Prologue どこかに(サムウェア) Somewhere
スケルツォ Scherzo マンボ Mambo チャチャ Cha-cha
出会いの場面 Meeting Scene クール〜フーガ Cool Fugue
決闘 Rumble フィナーレ Finale

約25分

[指揮] ディエゴ・マテウス

Diego Matheuz, Conductor

[ピアノ] 菊池亮太 *

Ryota Kikuchi, Piano *

[コンサートマスター] 西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール

■特別協賛：オリックス株式会社／公益財団法人オリックス宮内財団

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))

独立行政法人 日本芸術文化振興会

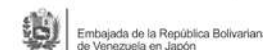
■後援：アメリカ合衆国大使館、アルゼンチン共和国大使館、ベネズエラ・ボリバル共和国大使館

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団



Profile



ディエゴ・マテウス [指揮] Diego Matheuz, Conductor

ベネズエラのエル・システマ出身で、その才能を開花させつつある第一世代の音楽家のひとり。これまでにヴェニスのフェニーチェ劇場の首席指揮者、クラウディオ・アバドの招きでボローニャ・モーツァルト管弦楽団の首席指揮者を務めている。また、メルボルン交響楽団の首席客演指揮者も務めている。

2018年12月、東京サントリーホールで開催されたドイツ・グラモフォン創立120周年記念特別ガラ・コンサートでは小澤征爾と交互に指揮を務め、アンネ=ゾフィー・ムターをソリストに迎えたサイトウ・キネン・オーケストラを指揮した。

以来、小澤征爾の招きでサイトウ・キネン・オーケストラと定期的に共演し、2022年6月、小澤征爾音楽塾初首席指揮者に就任した。これまでにミラノ・スカラ座管、フランス放送フィル、イスラエル・フィル、ロサンゼルス・フィルなどを指揮。2025年3月にはニューヨーク・フィにデビューし、同年10月にも共演予定。世界の主要オペラハウスや権威ある音楽祭にも定期的に客演している。ベネズエラでは、エル・システマ管弦楽団の育成とレパートリーの拡大に尽力し、シモン・ボリバル交響楽団の首席指揮者も務めている。



菊池亮太 [ピアノ] Ryota Kikuchi, Piano

ピアニスト・作曲家・YouTubeクリエイター。

4歳からピアノを始め、日本大学芸術学部在学中よりアーティストサポートや楽曲提供を行い、多くのテレビ、映画、アニメ、ゲーム音楽に携わる。

2019年には東京オリンピックWeb CMの楽曲を担当。

YouTubeチャンネルは登録者数78万人、総再生回数3億回超。コンサート活動では、サントリーホール単独公演やイギリスツアーが全公演SOLD OUT。また、FUJI ROCK FESTIVALや京都音楽博覧会、ドイツのAnimagiCなど大型音楽フェスにも出演。

数々の国際音楽コンクールで入賞し、オーケストラのソリストとしても活躍。2024年11月には日本人初のガーシュウインのコンチェルト全4曲を演奏。

クラシック音楽で培った確かな技術を基盤に、優れた即興力と編曲技術であらゆるジャンルを自在に演奏するそのスタイルは、唯一無二のピアニストとして高く評価されている。

Program Notes ●小室敬幸 [音楽ライター]

「北米」に分類されるカナダとアメリカ合衆国より以南を、「中南米（ラテンアメリカ）」と呼ぶ。それは植民地の時代、支配する側が主にアングロサクソン系だった北米に対し、ラテン系（スペイン、ポルトガルなど）が多かったのが中南米だったからだ。ヨーロッパからやってきたラテン系の白人、虐殺を逃れた先住民、そしてアフリカから奴隷として連れてこられた黒人、19世紀後半からはアジアからの移民も加わって、ラテンアメリカは北米以上に混血文化が育まれていったのだった。

■ ヒナステラ: バレエ音楽『エスタンシア』組曲 op. 8a

デビュー作から話題に ▶

アルベルト・ヒナステラ (1916~83) はアルゼンチンの首都ブエノスアイレスで、カタルーニャ系の父とイタリア系の母のあいだに生まれた。ウィリアムス音楽院でピアノなどを学んでいた14歳の頃、オーケストラの公演で聴いたストラヴィンスキーの『春の祭典』(1913)に衝撃を受け、作曲家を志す。ブエノスアイレス音楽院の在学中に完成したアルゼンチン北部に住む先住民グアラニー族を題材にしたバレエ『パナンビ(グアラニー語で“蝶”)』(1934~37)が1937年11月27日に初演され、ヒナステラのデビュー作となった。

バレエ、組曲の
作曲の経緯 ▶

そして『パナンビ』の評判によって、アメリカン・バレエ・キャラン(後のニューヨーク・シティ・バレエの前身)からの依頼が生まれ、振付はジョージ・バランシンが予定されていたのがバレエ『エスタンシア』(1941)である。牧場主であるガウチョの娘に惚れた都会出身の若い男を軸にしたバレエだ。ところが依頼団体が解散してしまい、1943年5月12日に組曲版が先立って初演された。

組曲の構成と特徴 ▶

バレエは「夜明け」「朝」「昼」「夜」「夜明け」という全5場。エスタンシア(農場)を舞台に、先住民とスペイン系の混血による騎馬民族でアメリカのカウボーイに相当するガウチョの生活とともに、ひ弱だと思われていた都会の青年がガウチョの娘に気に入られて結ばれるまでを描いている。第1曲「農場で働く人々」、働きはじめる前の静かな情景である第2曲「小麦の踊り」、馬に乗って牛を追いたてる第3曲「大農園の労働者たち」は、バレエでは第2場「朝」にあたる。第4曲「終幕の踊り」は第5場「夜明け」からとられたもので、力強い男性の民族舞曲マランボで物語が締めくくられる。なおヒナステラ自身は、こうした初期の作風を「客観的民族主義」(1934~48年)に位置づけている。

[楽器編成]フルート(ピッコロ持替)、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、シロフォン、トライアングル、タンバリン、カ斯塔ネット、シンバル、テナードラム、大太鼓、小太鼓、タムタム、ピアノ、弦楽5部。

■ ヒナステラ：ピアノ協奏曲第1番 op.28

民族主義から
新たなフェーズに

1959年、国際現代音楽協会 (ISCM) がローマで開催した音楽祭でヒナステラの弦楽四重奏曲第2番 op. 26 (1958) がヨーロッパ初演された。彼はこの時、出会ったヨーロッパの現代音楽の関係者たちが自分たちラテンアメリカの作曲家について殆ど知らず、また当時のヨーロッパの最先端の音楽と関わっていると思われていないのだと痛感。民族主義的な作風ではいつまでも古臭いとみなされてしまうと想着て、1958年以降は「新表現主義」と彼自身が呼んだ作風へと舵を切ってゆく。

新表現主義の一作▶

音楽における表現主義は、12音技法に到達する以前の新しいウィーン楽派の作風を指すことが多い。理性で抑え込むべきとされた人間の本能をさらけ出すような、ドロドロとした濃厚な音楽だ。簡単にいえば、そこに独自に発展させた12音技法を組み込んだのがヒナステラの「新表現主義」である。セルゲイ・クーセヴィツキー音楽財団からの委嘱で作曲されたピアノ協奏曲第1番 (1961) もこの時期に該当する。

曲の構造と
音楽の特徴

第1楽章〈カデンツァと変奏〉は冒頭で12音音列の主題を四和音 (×3 小節) にして提示。その直後に続く“カデンツァ”風のピアノは、主題の一部分を抜粋したり、音列自体を部分的に入れ替えたりした素材を変奏していく。一旦落ち着いた後、ピアノだけが静かに演奏しはじめるところから12音主題に基づく10の“変奏”となり、最後に“コーダ (結尾)”が付く。

第2楽章〈眩いスケルツォ〉は五部形式 (序奏-A-A'-A"-結尾) で、シンメトリックなアーチ構造を意識しているという。管弦楽だけの点描的な序奏のあと、ピアノは最初に12音音列を提示するが、前楽章と同様に12音から抜粋して自由に変奏していく。この部分が2度変奏されたあと、結尾で少しだけ再現がおこなわれる。

第3楽章〈極めて遅く〉は三部形式。管弦楽だけの第1部のあと、ピアノが加わると第2部へ。盛り上がっていく過程で、冒頭でソロ・ヴィオラが奏でていた旋律が形作られていく。ティンパニの静かなロールのあと、再びピアノが登場すると第3部となって今度は反対に旋律が解体されて音列に姿を変えていく。

第4楽章〈協奏的トッカータ〉はロンド形式 (序奏-A-B-A-C-A-D-A-コーダ)。ピアノが提示する反復する主題がロンド主題として何度もあらわれる間に、様々な要素が挟まれていく。プログレッシヴ・ロックのバンド、エマーソン・レイク&パーマーがカバーしたことでも有名な楽章だ。

[楽器編成] ピアノ独奏、フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、Es管クラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン

3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、吊しシンバル、小太鼓、テナードラム、タンバリン、トムトム、トライアングル、カステネット、タムタム、アンティークシンバル、グロックンシュピール、シロフォン、ハープ、チェレスタ、弦楽5部。

■ バーンスタイン： 『ウエスト・サイド・ストーリー』より「シンフォニック・ダンス」

構想の始まり▶

両親がユダヤ系ウクライナ人だったレナード・バーンスタイン (1918～90) は、ユダヤ文化を題材にした作品を数多く残している。シェイクスピアの戯曲『ロメオとジュリエット』 (16世紀末) をもとにしたミュージカル『ウエスト・サイド・ストーリー』 (1957年初演) も当初はキリスト教のカトリックとユダヤ教の対立に置き換える予定だった。

宗教から人種問題へ▶

ところが1955年、メキシコ系とアングロサクソン系で抗争が起きたという新聞記事を目にしたバーンスタインは、宗教ではなく人種の対立に変更するアイデアを思いつく。熟考された結果、メキシコではなく、アメリカ合衆国の市民権を持ちながらも自治領なので選挙権はないカリブ海の島国プエルトリコが選ばれた。そのため、作品内にラテン音楽が数多く持ち込まれることになったのだ。

ハイライトを
抜粋して構成

プエルトリコからニューヨークに移り住んだマリアと、ポーランドからの移民で貧しい家庭に生まれたトニーは恋に落ちる。しかし2人は対立する若者不良グループの関係者だったため、抗争に巻き込まれてしまうという悲恋の物語。ダンスが軸となる見せ場を抜粋し、当時忙しかったバーンスタインの監督のもとシド・ラミンとアーウィン・コストルが3管編成の管弦楽にオーケストレーションし直したのが「シンフォニック・ダンス (交響的舞曲)」である。

各場面の特徴▶

2つのグループの対立を描く「プロローグ」、対立を乗り越えて幸せになれる場所があるはずと願う「どこかに (サムウェア)」、それが夢のなかで実現した「スケルツォ」、グループの対立がダンス対決によって表現される「マンボ」、トニーとマリアが初々しく惹かれ合う「チャチャ」と「出会いの場面」、冷静に自分たちのグループに言い聞かせる「クール〜フーガ」、直接対決で両グループのリーダーが死んでしまう「決闘」、マリアの兄ベルナルドを殺してしまったトニーが死んでいく「フィナーレ」という流れで進む。

[楽器編成] フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、Es管クラリネット、バスクラリネット、アルトサクソフォン、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ボンゴ、吊しシンバル、シンバル、テナードラム、小太鼓、大太鼓、シロフォン、カウベル、ティンパレス、コンガ、警笛、ヴィブラフォン、タムタム、チャイム、ウッドブロック、トライアングル、グロックンシュピール、トムトム、ギロ、マラカス、フィンガーシンバル、タンバリン、ハープ、ピアノ (チェレスタ)、弦楽5部。